宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

批判的思考を促す問題解決型の情報モラル指導モデルの構築

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜松, 宏明, 渡木, 秀明, 新地, 辰朗, Hamamatsu, Hiroaki, Wataki, Shumei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4838

宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要　第22号，13－26，2014

批判的思考を促す問題解決型の情報モラル指導モデルの構築

浜松　宏明*　　渡木　秀明**　　新地　辰朗**

Development of a problem based teaching model about information moral to make children think critically

Hiroaki HAMAMATSU*　　Shumei WATAKI**　　Tatsuro SHINCHI**

1　はじめに

現在，携帯端末の所持年齢が低年齢化し，SNSやスマートフォン等の普及により，子どもたちが多様な手段でインターネットを利用し，他者とコミュニケーションをとることができる環境になっている。しかし，その一方で，インターネットを使ったコミュニケーションは，対面では考えられないようなトラブルや事件を引き起こすことがある。

このような状況の中，大量の情報の中から必要となる情報を取捨選択したり，コミュニケーションの効果的な手段としてコンピュータや情報通信ネットワークなどを活用したりする能力が子どもたちに求められている。情報社会で適正な活動を行うための基となる考え方と態度を育てる情報モラル指導方法の検討は重要課題の一つと言える[1)]。

情報モラル指導は，これまでも相手の立場や社会的な影響，自分への被害等を考えた上で，自ら判断し，ルールやマナーとして定められていない事態に直面しても，正しい行動をとることができる児童生徒を育成することを目標に行われてきた。ところが，実際の授業では，関係する知識や技能を教師が教え込むことも少なくなかった。児童生徒自らが考える活動を通して，情報モラルを確実に身に付けさせるためには，問題の発見，結果の予想，判断，情報の選択が必要となる指導過程を通して，様々な角度から適切な基準や根拠に基づき論理的に思考させることが重要である[1)]。

本研究では，情報モラル指導において，児童が様々な角度から考えながら，注意深くじっくりと，合理的かつ正確に考えることを “批判的思考” と捉え，この “批判的思考” を促すことにより，他者の意見や自分の思い込みに左右されずに，冷静に筋道を立てて，様々な角度から考えることができる児童を育成するために，「情報モラル指導モデル」の構築を目指した。まず，“批判的思考” についての先行文献を基に “批判的思考” の段階やねらいを学習指導過程へと整理した「批判的思考モデル」を作成した。次に，この「批判的思考モデル」と「問題解決型カ

*宮崎市立佐土原小学校　　**宮崎大学大学院教育学研究科

リキュラムモデル」を融合させ，さらに，家庭への働きかけを加えた「情報モラル指導モデル」を構築した。本研究では，「情報モラル指導モデル」の構築について整理した後，「情報モラル指導モデル」による道徳の授業検証について述べる。

2　批判的思考モデル

2.1　情報モラル指導における思考

小学校において身に付けさせる情報モラルは，小学校学習指導要領解説総則編の中で，「他者への影響を考え，人権，知的財産権など自他の権利を尊重し情報化社会での行動に責任をもつこと」，「危険回避など情報を正しく安全に利用できること」，「コンピュータなどの情報機器の使用による健康とのかかわりを理解すること」と具体的に示されており，児童がこれらの情報モラルを確実に身に付けることができるように，以下の５つの学習活動が例として示されている[1)]。

○　情報発信による他人や社会への影響について考えさせる学習活動
○　ネットワーク上のルールやマナーを守ることの意味について考えさせる学習活動
○　情報には自他の権利があることを考えさせる学習活動
○　情報には誤ったものや危険なものがあることを考えさせる学習活動
○　健康を害するような行動について考えさせる学習活動

これら５つの学習活動は，全てが考えさせる学習活動となっており，情報モラル指導は，児童の思考を促すことを重視していることがわかる。つまり，情報モラル指導では，情報の収集，判断，処理，発信などの情報を活用する各場面において，様々な角度から適切な基準や根拠に基づいて論理的に考える “批判的思考” を促す必要があると言える。

2.2　批判的思考

批判的思考について，国立教育政策研究所は，特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果（2013）の中で，「送られてくる情報の真偽・正誤・適否等について，自ら確かめ評価しながらこれを受け止めようとする精神的態度を指す」と示している[2)]。また，言語活動の充実に関する指導事例集（2010）では，「他者の考えを認識しつつ自分の考えについて前提条件やその適用範囲などを振り返るとともに，他者の考えと比較，分類，関連付けなどを行うことで，多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味し，考えを深めること，すなわちクリティカル・シンキングが大切である」と示している[3)]。

先行研究によると，楠見は，「批判的思考とは，相手を批判する思考とは限らず，むしろ自分の推論過程を意識的に吟味する反省的思考である」と述べている[4)]。また，有元は，「どんな問題点があるかを客観的に観察して，よいか悪いかの評価を行い，どうしたら問題を解決できるかを考えること」と定義している[5)]。

これらから，“批判的思考” は，否定的に批判する態度・立場といったネガティブな意味合いではなく，適切な基準や根拠に基づく，論理的で前向きな思考と考えることができる。

本研究では，“批判的思考” を「問題を発見し，結果の予想，判断，情報の選択が必要となる場面で，様々な角度から考えながら，注意深くじっくりと，合理的かつ正確に考える思考」と定義することにした。

2.3　批判的思考モデル

道田の批判的思考の概念図式[6]と樋口の批判的思考の構成要素[7]を参考にして，「批判的思考モデル」を作成した。“批判的思考” を授業の指導過程に具体的に反映させていくために，図１に示すように “批判的思考” の５つの段階と３つのねらいを明示した。

『１　問題の発見，把握』は，「問題はないのか」「おかしいぞ，本当か」といった解決すべき問題への気付きの段階である。『２　問題の分析，構造化』は，「問題はどうなっているのか」「どのような状況にあるのか」を認識し，問題を分類したり比較したりする段階である。『３　結果の予想』は，問題を分析した後，やってよいこととやってはいけないことを考えさせ，「どんなことになるのか」といった結果についての予想に基づく仮説を設定する段階である。『４　解決策の構想』は，やってはいけないことをした場合，「どうすればよかったのか」といった解決策を構想し，仮説の検証を行う。この段階は，予想した結果の評価にあたり，合わせて解決策の妥当性についての評価も含む。『５　判断・意思決定』は，「認め受け入れるべきか」について考える段階である。

“批判的思考” のプロセスでは，これらの５つの段階が繰り返し出現することや５つの段階の順序が入れ替わることもある。この５段階をしっかりと踏まえ指導することが，“批判的思考” の３つのねらいである『多面的・多角的な考察』『情報の正誤の判断』『価値判断』へつながると考える。

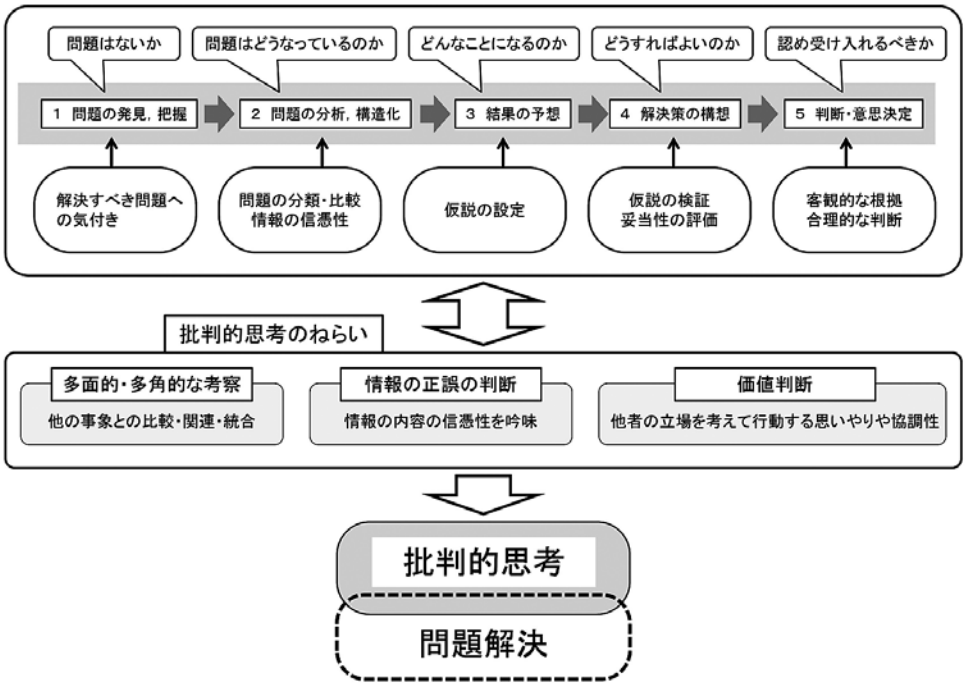


図１　批判的思考モデル

3　情報モラル指導モデル

3.1　問題解決型カリキュラムモデル

市川は,「意識的に批判的思考を育成する学習活動を行うことは，同時に問題解決能力を高めることにつながる」と述べている[8)]。問題解決能力は，教科等の学習場面で求められ，発揮されるだけではなく，日常の生活や社会において問題場面に遭遇したとき，主体的に解決するときに必要となる能力である。

神奈川県立総合教育センターは，デューイ（Dewey. J）の５種類の反省的思考やPISA 型問題解決のプロセスを踏まえ，問題解決能力育成のためのガイドブック（2008）を作成している[9)]。この中で，問題解決能力は,「学習場面において，これまでに身に付けた知識や技能などを使って，問題を認識し，情報を収集・分析するなどして，方策を決め，実行していく力」として示されている。問題解決につながる情報モラル指導のために，神奈川県立総合教育センターの問題解決能力育成のためのガイドブックを参考にして,「批判的思考モデル」と「情報モラル指導モデル」を関係付ける図２に示す「問題解決型カリキュラムモデル」を考案した。

このモデルは，問題解決が必要な場面において，既習の知識や経験と比較して，問題を理解し，必要な情報を収集・選択・分析しながら，思考・判断するまでの一連のプロセスから成っている。これを用いて，問題の解決方法を導き出し，実行することができる能力の育成を目指す。

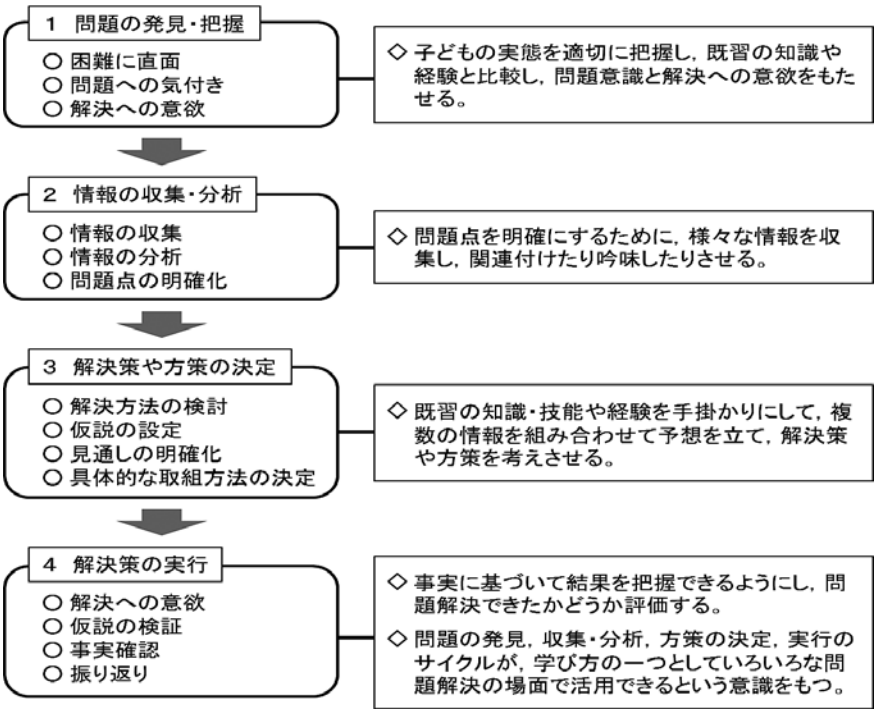


図２　問題解決型カリキュラムモデル

3.2　情報モラル指導モデル

「批判的思考モデル」と「問題解決型カリキュラムモデル」をそれぞれの段階の関連を図りながら融合させ，図３に示すように「情報モラル指導モデル」として構築した。「情報モラル指導モデル」では，図４に示すようにⒶ～Ⓖの７段階で成る情報モラルを育てる指導の流れと指導法及び留意点を明示した。

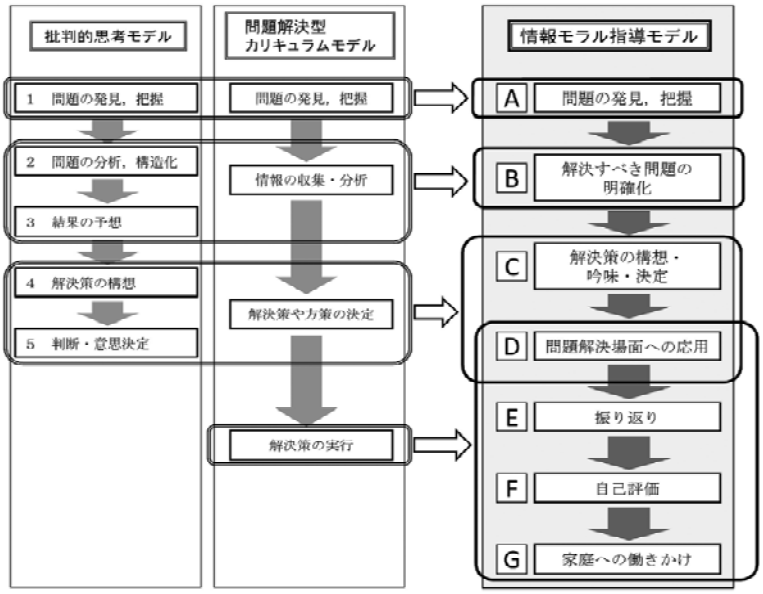


図３　３つのモデルの関連図

Ⓐ「問題の発見，把握」の段階では，情報モラルを自覚させる問題を提示し，問題意識をもたせる。Ⓑ「解決すべき問題の明確化」の段階では，問題の結果を予想させ，情報が他人や社会へ与える影響について判断させるなど，問題点を明確にさせていく。この段階は，結果を予想させることにより，問題点をより明確に理解させることができるという点で，「批判的思考モデル」の『２　問題の分析，構造化』と関係している。Ⓒ「解決策の構想・吟味・決定」の段階では，『２　問題の分析，構造化』や『３　結果の予想』を基にして，様々な角度から，解決策を共感的，批判的に考え，比較，分類，関係付けをさせた上で，最適な解決策を絞らせる。Ⓓ「問題解決場面への応用」の段階では，不適切な情報のやりとりを行うことが予想される場面や，実際に起こった事例をもとに学習を進め，問題解決場面で活用できるようにしていく。ⒸとⒹの２つの段階は，問題の解決策を構想し，問題解決場面で実践できるか判断させたり，解決策を再検討させたりする点で，「批判的思考モデル」の『４　解決策の構想』，『５　判断・意思決定』と関係している。Ⓔ「振り返り」とⒻ「自己評価」の段階では，授業や情報モラルのねらいについて振り返りや自己評価を実施する。Ⓔで授業を振り返らせ，授業での学びをまとめさせた後に，Ⓕ自己評価をさせることにより，自分の立場で授業を振り返らせ，家庭での実践意欲につなげるものである。Ⓖ「家庭への働きかけ」の段階では，日常生活で実践できるように，授業後，学校から家庭へ働きかけていく。

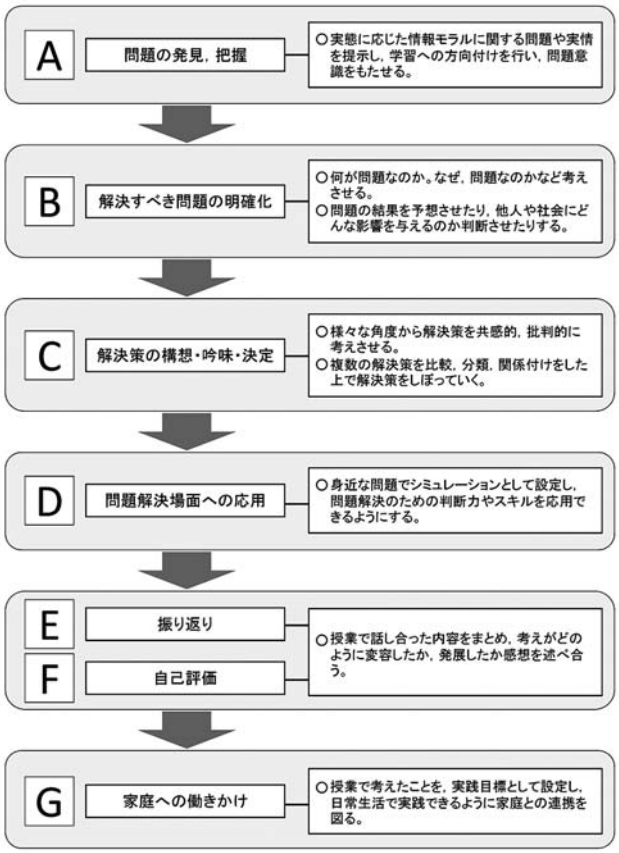


図４　情報モラル指導モデル

４　授業実践

本章では，構築した「情報モラル指導モデル」に示したプロセスに沿った道徳の指導計画の作成，授業実践，及び授業検証について述べる。授業は，平成25年11月28日に，宮崎市内のＡ小学校第５学年１組（児童数22名）と２組（児童数21名）の２クラスで実施した。

4.1　指導計画

「情報モラル指導モデル」に沿って，表1に示す道徳の時間の指導計画を作成した。

導入のⒶ「問題の発見，把握」が，インターネット掲示板の画像を提示し，問題意識をもたせるに対応している。展開前段のⒷ「解決すべき問題の明確化」，Ⓒ「解決策の構想・吟味・決定」が，自分への被害や他人や社会への影響について予想させ，問題があることに気付かせ，『２　問題の分析，構造化』を基にして解決策を構想させるに対応している。展開後段のⒹ「問題解決場面への応用」が，自分で判断し，意思決定して行動できるように“批判的思考”を促していくに対応している。終末のⒺ「振り返り」では，感じたことや考えたことを互いに発表させ，学習のまとめとする。

この道徳の授業における主題は自由・自律であり，主なねらいは自由を大切にし，自律的で責任ある行動をしようとする心情を育てることである。関連する道徳的な価値としては，規律尊重・公徳心・権利義務がある。

扱った資料「だれも知らないニュース」(文溪堂発行：5年生の道徳) の概要は，インターネットの掲示板を利用して情報を収集したり，仲間を作ったりして楽しんでいるタレントのシュウのファンである主人公の美夏が，ある日テレビ番組の撮影のために近くの商店街にシュウがやってくるという噂話を聞き，その真偽を確かめずにその情報を掲示板に書き込む。当日，美夏は別の用事で出かけるが，その帰り道，商店街でシュウを見るために来たという人に会い，事の重大さに気付くというものである。

表1　指導計画

段階	学習内容及び学習活動	情報モラル指導モデルとの対応	指導上の留意点	資料準備
導入	1　インターネット掲示板を見て考える。	A 問題の発見，把握	○　インターネット掲示板の画像を提示し，自由に感想を出させながら問題意識をもたせ，本時学習への方向づけを図る。	パソコン テレビ
展開前段	2　資料の前半部分を読み，話し合う。 ○だれも知らない情報を書き込む美夏の気持ち ○「結果の予想」 ・自分への被害 ・他人や社会への影響 3　資料の後半部分を読み，話し合う。 ○いとこから集まった人たちのことを聞いた美夏の気持ち ○「問題の分析」 ○「解決策の構想」	B 解決すべき問題の明確化 B 解決すべき問題の明確化 C 解決策の構想・吟味・決定	○　読むスピードや間の取り方に気を付けることで，児童が資料に入っていきやすくする。 ○　場面絵を提示し，主人公に共感させながら考えさせる。 ○　掲示板に熱中する美夏の心情や行動に関心をもたせる。 ○　美夏のとった行動から予想される結果についてよい面だけでなく，自分への被害や他人や社会への影響についても予想させる。 ○　いとこの話を聞いて，真っ青になった美夏の気持ちに共感させ，考えさせる。 ○　美夏の気持ちを考えさせる中で，情報の発信には責任が伴うことに気付かせる。 ○　情報発信前では，送信ボタンを押す前に正しい情報かどうか，どのようなことになるかなど十分に考えなかったことに問題があることに気付かせる。 ○　情報発信後では，商店街のおじさんに真偽を確かめたにもかかわらず，掲示板を修正しなかった点が問題であることに気付かせる。 ○　問題を分析した後，どうすればよかったのか解決策を考えさせる。	場面絵 ワークシート ワークシート ワークシート
展開後段	4　自分で考え，判断し，責任ある行動をしようとする場面を設定し，話し合う。 ○日常の生活との関連	D 問題解決場面への応用	○　自分で判断し，意思決定して行動できる道徳的判断力や実践力を高められるような場面設定をする。 ○　自由には責任が伴う，自分が責任をとることや情報社会によりよく参画する心情を高める。	
終末	5　授業の感想を発表し合う。	E 振り返り	○　授業で感じたことや考えたことを発表することで価値が深まったか確認する。	

4.2　授業検証方法

前節で示した授業を検証するために，授業中のワークシートの記述及び授業後に実施した児童へのアンケートを分析した。ワークシートの記述では，“批判的思考” を促すことができているかどうかを，情報発信に関する場面に焦点を当て，次の3つについて分析した。

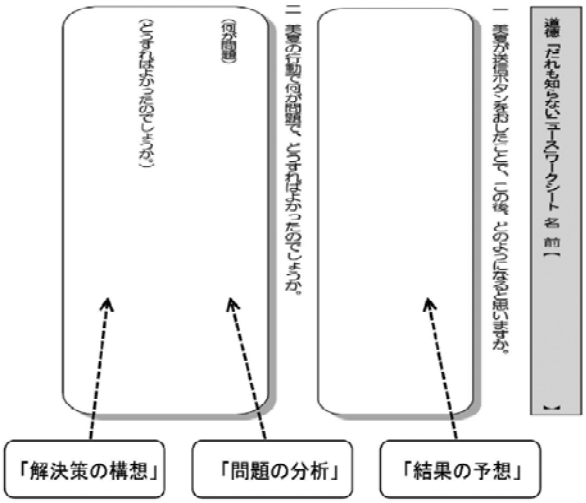


図５　ワークシート（図８に児童の記述例）

○　「結果の予想」では，どんな結果が予想されるのか。
○　「問題の分析」では，何が問題であるのか。
○　「解決策の構想」では，どうすればよかったのか。

授業後のアンケートでは，図６に示す６項目の質問を用意した。表１中の段階Ⓑ「解決すべき問題の明確化」に対応するのが，項目１～２である。資料の主人公の立場に立って行動の結果を予想し，何が問題であったかについて多角的，共感的かつ批判的に考えることができたかどうか確かめる質問である。段階Ⓒ「解決策の構想・吟味・決定」に対応するのが，項目３であり，「結果の予想」や「問題の分析」を基にして，解決策について構想する質問である。項目４～６は，「批判的思考モデル」に示した３つのねらいに対応して評価するものである。項目４は，自分が考えた結果についての予想や解決策を他者の考えと比較しながら，分類や関係付けをしていけたかを『多面的・多角的な考察』について評価する質問である。項目５は，他者や社会への影響を考える思いやりや協調性に関する『価値判断』について評価する質問である。項目６は，『情報の正誤の判断』について評価する質問である。

1　主人公の行動の何が問題であるのか考えることができましたか。
　できた　　少しできた　　あまりできなかった　　できなかった
2　主人公の立場に立って結果を予想することができましたか。
　できた　　少しできた　　あまりできなかった　　できなかった
3　問題点から，どうすればよかったのか考えることができましたか。
　できた　　少しできた　　あまりできなかった　　できなかった
4　自分が考えた結果の予想や解決策を友達の考えと比べながら考えることができましたか。
　できた　　少しできた　　あまりできなかった　　できなかった
5　情報を発信するとき，他者や社会へのえいきょうを考えたり判断したりできましたか。
　できた　　少しできた　　あまりできなかった　　できなかった
6　情報が正しいかどうかを考え，しっかりと判断することができましたか。
　できた　　少しできた　　あまできなかった　　できなかった

図６　アンケート項目

4.3　授業検証

4.3.1　ワークシート分析

展開前段で，図１中の「批判的思考モデル」５段階の内，３つの段階についての記述を求めた。どんな結果が予想されるのか（『３　結果の予想』），何が問題であるのか（『２　問題の分析』），どうすればよかったのか（『４　解決策の構想』）の３つについて思考させるねらいがあった。

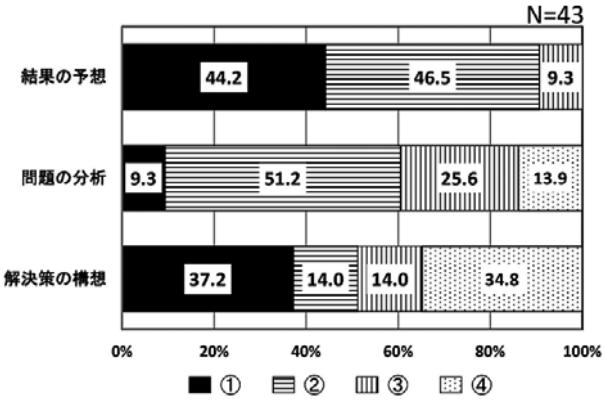


図７　ワークシートの結果

図５のワークシート中の「結果の予想」について想定した記述は次の３通りであった。想定１-①，想定１-②の記述内容は “批判的思考” ができていると考えた。

展開前段での「結果の予想」における想定される児童の記述内容の分類	
想定 1-①	よい結果（自分に対するお礼，賞賛）と悪い結果（自分に対する不信感，社会への悪影響）の両方を予想する。
想定 1-②	悪い結果（自分に対する不信感，社会への悪影響）のみを予想する。
想定 1-③	よい結果（自分に対するお礼，賞賛）のみを予想する。

「結果の予想」についての記述内容を分析した結果，想定１-①に関する記述があったのは，44.2%（19名）で，「もし…ならば」という記述で始まり，情報が本当の時の賞賛と本当でない時の不信感について多面的・多角的な思考で記述されていた。想定１-②に関する記述があったのは，46.5%（20名）で，「後悔する。間違えたら大変なことになる。迷惑をかける。」など記述されていた。想定１-③に関する記述があったのは，9.3%（４名）で，「ありがとうと言われる。ファンが集まって喜んでもらえる。」など記述されていた。「結果の予想」に対しては，想定１-①44.2%（19名），想定１-②46.5%（20名）の合計90.7%（39名）がよい結果と悪い結果の両方から予想したり，他者や社会への影響面を考えたりできていたと言える。

図５のワークシート中の「問題の分析」について想定した記述は次の４通りであった。想定２-①，想定２-②，想定２-③の記述内容は “批判的思考” ができていると考えた。

展開前段での「問題の分析」における想定される児童の記述内容の分類	
想定 2-①	情報の正誤（事実かどうか確かめなかったこと）と情報発信の責任（送信ボタンを押したこと）の両方を問題として判断する。
想定 2-②	情報発信の責任（送信ボタンを押したこと）のみを問題として判断する。
想定 2-③	情報の正誤（事実かどうか確かめなかったこと）のみを問題として判断する。
想定 2-④	①～③の以外の “批判的思考” ではないその他記述内容

「問題の分析」についての記述内容を分析した結果，想定２-①に関する記述があったのは，9.3%（４名）で，「事実を確かめなかったこととうわさかもしれない情報を書き込み，送信したこと」を問題として捉え，多面的・多角的な思考で記述していた。想定２-②に関する記述があったのは，51.2%（22名）で，「そのまま書き込み，投稿したこと，確かでない情報を書き込

んだこと」等を問題として捉えていた。想定２-③に関する記述があったのは，25.6%（11名）で,「事実を確かめなかったこと，いきなりうわさを信じてしまったこと，思い込みがあったこと」等を問題として捉えていた。想定２-④のその他の記述があったのは，13.9%（６名）で,「掲示板に情報を書き込みたいと思ったこと」等を問題として捉えていた。「問題の分析」に対しては，想定２-①9.3%（４名），想定２-②51.2%（22名），想定２-③25.6%（11名）の合計86.1%（37名）が情報の正誤や情報発信の責任について問題点を的確に捉えることができたと言える。

図５のワークシート中の「解決策の構想」について想定した記述は次の４通りであった。想定３-①，想定３-②，想定３-③，想定３-④の記述内容は“批判的思考”ができていると考えた。

展開前段での「解決策の構想」における想定される児童の記述内容の分類	
想定 3-①	情報が正しいか確かめてから送信する。
想定 3-②	もしかしたら，うわさによればなどと一言足して送信する。
想定 3-③	送信しない，書き込まない。
想定 3-④	情報が正しいか確かめる。

「解決策の構想」についての記述内容を分析した結果，想定３-①37.2%（16名），想定３-②14.0%（6名），想定３-③14.0%（6名），想定３-④34.8%（15名），の100%（43名）が，情報の正誤の確認の大切さ，情報発信の正確さ，送信するときの責任の大きさ等の考えで解決策を構想できたと言える。

しかし，情報の正誤を確認した後に，正しい情報を送信するまでの一連の解決策を構想した児童は，想定３-①の37.2%（16名）に留まっている。問題解決につなげるためには，責任をもって情報発信するといった行動にまで結び付く“批判的思考”を促していくことが課題である。

前述の「結果の予想」,「問題の分析」,「解決策の構想」の内,「結果の予想」については，想定１-①44.2%（19名）と想定１-②46.5%（20名）と大きく分かれた。そこで,「結果の予想」での思考と次の「問題の分析」での思考に関係性があるか分析した結果が表２である。

表２　「結果の予想」と「問題の分析」についてのワークシートの記述内容の関係

N＝43

		問題の分析についての記述				合 計
		想定2ー① 情報の正誤と情報発信の両方	想定2ー② 情報の発信のみ	想定2ー③ 情報の正誤のみ	想定2ー④ その他	
結果の予想についての記述	想定1ー① 悪い結果とよい結果の両方	4	6	8	1	19
	想定1ー② 悪い結果のみ	0	14	2	4	20
	想定1ー③ よい結果のみ	0	2	1	1	4
合 計		4	22	11	6	43

想定１-①の19名のうち18名の児童は,「問題の分析」では，想定２-①が４名，想定２-②が６名，想定２-③が８名と３つの“批判的思考”に分かれていた。“批判的思考”ではない想定２-④その他の記述をした児童は１名であった。つまり,「結果の予想」で，よい結果と悪い結

果の両方について予想できていれば，様々な角度から問題を発見する傾向にあると考えられる。また，前の段階での『多面的・多角的な考察』が，次の段階にも結び付く傾向があると言える。

想定１-②で“批判的思考”ができていた20名中16名の内，14名が想定２-②に著しく偏っており，残りの２名は想定２-③であった。つまり，「結果の予想」で，悪い結果のみを予想をした場合，“批判的思考”はできているものの，『多面的・多角的な考察』には至らないことがわかる。また，前の段階で，一つの“批判的思考”しかできない児童は，次の段階でも一つの“批判的思考”しかできない傾向があると言える。

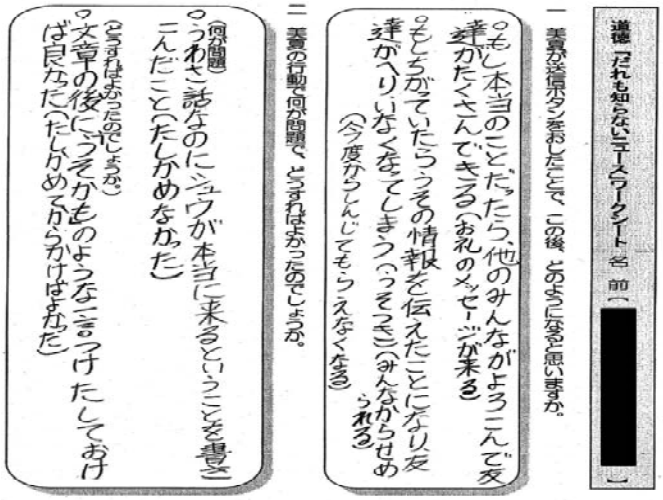


図８　児童が書いたワークシート

4.3.2　アンケート分析

図６のアンケート項目の中から，「問題の分析」，「結果の予想」，「解決策の構想」の３つについて，児童に“批判的思考”ができたかどうかをたずねたアンケート結果を整理したものが図９である。

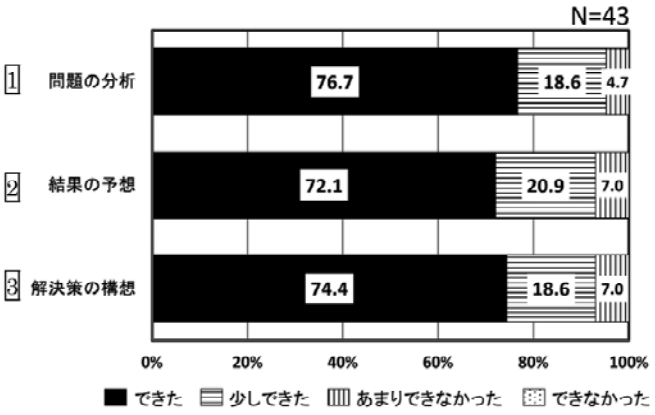


図９　アンケート結果（批判的思考の段階）

「問題の分析」，「結果の予想」，「解決策の構想」の全てで，それぞれ「できた」と回答した児童が，70.0%（30名）を越えていた。「情報モラル指導モデル」のプロセスに沿って，“批判的思考”を促したことにより，児童は，結果を予想し，解決すべき問題を明確にして，解決策を考えることができたと自己評価している。

次に，図６のアンケート項目の中から，“批判的思考” のねらいとする『多面的・多角的な考察』，『価値判断』，『情報の正誤の判断』の３点について児童に “批判的思考” ができたと思ったかどうかをたずねたアンケート結果を整理したのが図10である。

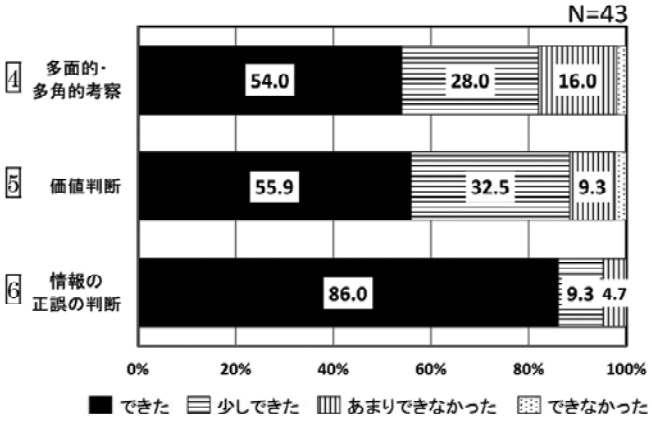


図10　アンケート結果（批判的思考のねらい）

『情報の正誤の判断』について，「できた」と回答する児童は，86.0%（37名）であり，“批判的思考” を促すことの有効性を確認できた。

しかし，『多面的・多角的な考察』，『価値判断』について，「できた」とする回答は，それぞれ54.0%（23名）と55.9%（24名）に留まる。多様な考えを求めたり，他者や社会への影響を考えさせたりする “批判的思考” を促す指導については更に研究を深める必要がある。

5　授業後の実践

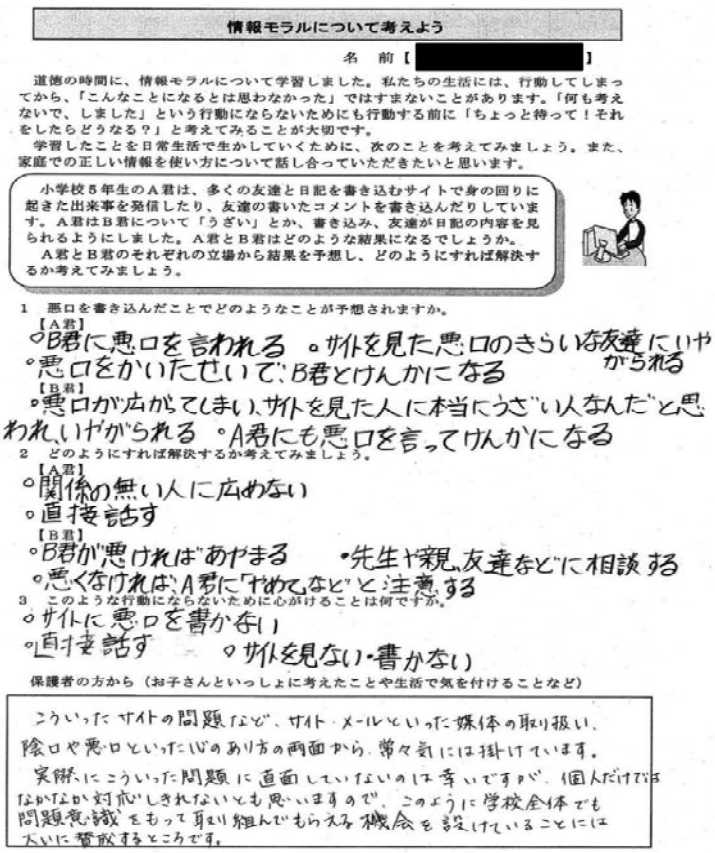
5.1　授業後の実践

「情報モラル指導モデル」に示したⒼ家庭への働きかけとして，図11に示す家庭版情報モラルワークシートを作成し，各家庭に配付した。内容は，日記を書き込むサイトに友達の悪口を書き込む場面を設定した。

情報を書き込んだ側と書き込まれた側の両方の立場から，「結果の予想」と「解決策の構想」の２つを考えさせることで，『多面的・多角的な考察』を求めた。また，解決策の実行の視点から，問題解決につながる行動に結び付ける問いを入れ，児童に自らの考えを記述させた。

家庭版情報モラルワークシートを回収し，記述内容を確認したところ，「結果の予想」と「解決策の構想」について，被害者と加害者の両方の立場に立って考えることにより，安易な書き込みにより不特定多数の人が内容を知り，その反応の大きさに戸惑うことや，被害が拡大する恐れを想像することができずに書き込むという情報モラルの未熟さによる行動について，考えを深めることができていた。また，“批判的思考” で有効な解決方法を見つけ出したり，問題場面に遭遇した際の具体的な解決方法を考えたりすることもできていた。

保護者の方からのコメント（一部抜粋）
・ネットで悪口を書き込むのではなく，直接本人と話すことが大切であると思う。ネットで書き込んだ場合どれだけ大変か日頃より話し合うべきだと思う。
・将来的にネット利用をするとき，自分がされていやなことはしない，よく考えて行動することを分かっていて欲しい。
・情報モラルについて子どもたちに指導していくことはとても大切なことだと思う。
・インターネットは便利で手軽な反面，匿名性や思いがけない情報の広がりから危険性と隣り合わせである。安易に発信しないことを話し合った。



情報モラルについて考えよう

名　前【[redacted]】

道徳の時間に、情報モラルについて学習しました。私たちの生活には、行動してしまってから、「こんなことになるとは思わなかった」ではすまないことがあります。「何も考えないで、しました」という行動にならないためにも行動する前に「ちょっと待って！それをしたらどうなる？」と考えてみることが大切です。

学習したことを日常生活で生かしていくために、次のことを考えてみましょう。また、家庭での正しい情報を使い方について話し合っていただきたいと思います。

小学校５年生のＡ君は、多くの友達と日記を書き込むサイトで身の回りに起きた出来事を発信したり、友達の書いたコメントを書き込んだりしています。Ａ君はＢ君について「うざい」とか、書き込み、友達が日記の内容を見られるようにしました。Ａ君とＢ君はどのような結果になるでしょうか。

Ａ君とＢ君のそれぞれの立場から結果を予想し、どのようにすれば解決するか考えてみましょう。

1　悪口を書き込んだことでどのようなことが予想されますか。

【A君】
◦B君に悪口を言われる　◦サイトを見た悪口のきらいな友達にいやがられる
◦悪口をかいたせいで、B君とけんかになる

【B君】
◦悪口が広がってしまい、サイトを見た人に本当にうざい人なんだと思われ、いやがられる　◦A君にも悪口を言ってけんかになる

2　どのようにすれば解決するか考えてみましょう。

【A君】
◦関係の無い人に広めない
◦直接話す

【B君】
◦B君が悪ければあやまる　•先生や親、友達などに相談する
◦悪くなければA君に「やめて」などと注意する

3　このような行動にならないために心がけることは何ですか。

◦サイトに悪口を書かない
◦直接話す　◦サイトを見ない・書かない

保護者の方から（お子さんといっしょに考えたことや生活で気を付けることなど）

こういったサイトの問題など、サイト・メールといった媒体の取り扱い、陰口や悪口といった心のあり方の両面から、常々気には掛けています。
実際にこういった問題に直面していないのは幸いですが、個人だけではなかなか対応しきれないとも思いますので、このように学校全体でも問題意識をもって取り組んでもらえる機会を設けていることには大いに賛成するところです。

図11　家庭版情報モラルワークシート

6　おわりに

本研究では，“批判的思考” を促す問題解決型の情報モラル指導のために，「批判的思考モデル」と「問題解決型カリキュラムモデル」を融合させて構築した「情報モラル指導モデル」に沿った道徳における情報モラルの授業実践を行った。ワークシート及びアンケートの分析の結果，情報モラルを育成するためには，児童の “批判的思考” に基づく問題解決が有効であることを確認できた。

しかし，“批判的思考” に基づきながら，適切に行動できる児童の育成を目指す上での課題も明らかになった。「解決策の構想」においては，情報に対する評価に加え，その後の行動まで考えることが望ましいが，本研究での授業では，“批判的思考” はできていても，問題解決に向けた行動にまで考えが至っていない児童も多い（4.3.1で述べた想定３-④にあたる全43名中15名）ことがわかった。この15名の児童は，『多面的・多角的な考察』ができないために，ただ一つの解決策をもって「解決策の構想」ができたと自己評価した（同じく想定３-④の15名中12名）ことも確認できた。『多面的・多角的な考察』において，行動までを構想できる “批判的思考” を促す手立てを検討する必要があると言える。

参考文献

1）文部科学省（2010），小学校学習指導要領解説総則編 p68
2）国立教育政策研究所教育課程研究センター（2013），特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果～21世紀グローバル社会における論理的に思考する力の育成を目指して～ p192
3）文部科学省（2010），言語活動の充実に関する指導事例集小学校版 p8
4）楠見孝（2010），批判的思考と高次リテラシー思考と言語 pp134-160，北大路書房
5）有元秀文（2008），必ずPISA型読解力が育つ七つの授業改革-読解表現力とクリティカル・リ-ディングを育てる方法 p59，明治図書
6）道田泰司（2000），批判的思考研究からメディアリテラシーへの提言，コンピュータ＆エデュケーションVol.9 2000 p55，コンピュータ利用教育協議会
7）樋口直宏（2012），批判的思考の育成 pp22-25，教育研究特集社団法人初等教育研究会
8）市川隆司（2012），21世紀型学力と情報教育に関する考察－問題解決と批判的思考を視点として pp25-31
9）神奈川県立総合教育センター（2008），「問題解決能力育成のためのガイドブック」 pp3-10